

国立情報学研究所ニュース 第8号

デジタル・シルクロード東京シンポジウムを開催



一般公開セッションでの講演



カーン：ユネスコ事務局長補

白川哲久 文部科学省国際統括官
(日本ユネスコ国内委員会事務総長)

学術総合センター1階ロビーでの展示



専門セッションでのパネル討議



末松安晴 国立情報学研究所長

国立情報学研究所では、ユネスコ（国際連合教育科学文化機関）及び日本ユネスコ国内委員会との共催により、平成13年12月11日から13日、学術総合センターを会場に「デジタル・シルクロード」東京シンポジウムを開催しました。

このシンポジウムは、文化とデジタル情報技術の融合による新たな視点でのシルクロード研究と文化遺産保存をテーマに、風化、破壊、資料埋没等の危機に瀕しているシルクロードの文化遺産の保存と世界的情報資源としての共有・公開を目指して、ユネスコとの協力により開催したものです。

11日は一般公開セッションとして、中根千枝東京大学名誉教授の「シルクロードの人々とその社会的文化的交錯」、樋口隆康京都大学名誉教授の「アフガニスタンの文化遺産」及びアブドゥル・カーン：ユネスコ事務局長補の「デジタル・シルクロード構築のための新たなデジタル技術の探求」などの講演が行われました。

12日からは専門セッションとして、12日午前はシルクロード研究の新たな観点による文化財保存、VR、リモートセンシングなど多様な視点からの発表があり、

午後のポスター・セッションでは22に及ぶポスターの前に熱心な議論が行われました。13日午前は新たな視点からのシルクロード調査研究の計画や将来への提案、午後はパネル討議とシンポジウムの総括が行われました。また、会議と並行して、学術総合センター1階ロビーではシンポジウムに関連したデジタル情報技術の展示が行われました。

シンポジウムには、海外からの参加者約30名と一般の参加者を含めて約330名の参加があり、文化遺産保存と活用・公開におけるデジタル情報技術の可能性について活発な議論がなされました。

ユネスコでは、アフガニスタンなどの危機的な状況にあるシルクロードの文化遺産を最新のデジタル情報技術で記録・保存し、コンピュータ・ネットワークを通じてデータを世界的に共有する試みに着手しようとしており、今回のシンポジウムの成果を今後の国際協力プロジェクトにつなげたいとしています。

(デジタル・シルクロード東京シンポジウム運営委員長
小野欽司 国立情報学研究所研究総主幹 / 教授)

DC2001：ダブリンコアおよびメタデータ応用に関する国際会議を終了して



2001年10月22日から26日にかけて、一橋記念講堂にてDC2001：International Conference on Dublin Core and Metadata Applications を開催しました。この会議のテーマとするメタデータとはデータに関するデータ、あるいは情報に関する情報、という意味で、インターネット上で情報を探そうとするときにその手がかりになる情報として現在関心が高まっています。

Dublin Core Metadata Initiative (DCMI)は、1995年以来毎年一回ワークショップを開催しメタデータに関する標準化活動を推進してきました。DCMIは本年第9回目に当たる会合を企画するに当たり、ワークショップに加え研究開発や実用化の成果を発表するconference、さらにメタデータの普及啓蒙のためのチュートリアルを含んだ総合的な催しにするという方針を出し、その最初の会議となりました。またアジア地域で開催される最初の会議でもありました。

会議の前半の22日から24日は従来型のワークショップで、メタデータ標準化に関わるホットなトピックの中から、アーキテクチャ/レジストリー、図書館、政府、教育、引用、エージェントのテーマを選び、それぞれセッションにわかれて討議しました。全体会議でモデレータから各トピックの扱いについて報告され、そのまとめは程なくWWWを通じて公開されることになっています([http:// www.dublincore.org/](http://www.dublincore.org/))。今回のワークショップでは、多言語の問題についてグループを作ることが提案され、ダブリンコアメタデータにおける言語の問題を新たな課題として取り上げられることになる予定です。これは我が国に取っても重要な課題といえます。



ポスター発表の前に討議する参加者



Stuart Weibel,
Executive Director
DCMIによる講演

セッションでの
研究発表



24日から26日は、conferenceに当てられました。各国から投稿された論文が査読され、会議では口頭発表35件、ポスター11件が選ばれて発表されました。基調講演は京都大学総長の長尾真先生に御快諾いただき、およそ一時間に渡り「マルチメディア情報のためのメタデータ」というタイトルで、電子図書館などのご研究をふまえて、メタデータの重要性についてのご講演をいただきました。会議の中では、「教育におけるメタデータ」、「政府情報」、「Open Archives Initiative」、「次世代インターネット」、「地理情報システム」の五つのトピックに関し、特別セッションを設けました。招待講演者を中心にこれらのトピックに特化したメタデータ応用の実際についての発表をまとめました。また、ダブリンコアに関するチュートリアルも行われ、図書館関係の方も多く参加され好評を博したことは主催者として大変喜ばしく思っております。参加者は267人で、27ヶ国からの参加者が集まりました。次回会議は2002年秋にイタリアで開催の予定ですので、メタデータの実践にたずわっている方は是非参加をお考え下さい。なお、DC2001のオンラインのプロシーディングは<http://www.nii.ac.jp/dc2001/>から入手できます。

DC2001の主催は、国立国会図書館、科学技術振興事業団（JST）、通信総合研究所（CRL）、図書館情報大学、DCMIそして国立情報学研究所の六機関が共同で行いました。ここで、文部科学省、JST、CRL、NIIから資金的な援助をいただいていることを記します。今回の会議の成功にご協力いただいた多くの方と会議にご参加いただいた方に改めて御礼申し上げます。

(DC2001組織委員長
情報学資源研究センター長 / 教授 安達淳)

第1回Mlabnet（仮想マルチメディア研究所）および第8回WAINS（学術情報ネットワークとシステムに関する国際ワークショップ）の開催



軽井沢国際高等セミナーハウス前にて



ワークショップにおける講演

第1回Mlabnet（Multimedia Laboratory over Internet：仮想マルチメディア研究所）および第8回WAINS（Workshop on Academic Information Networks and Systems：学術情報ネットワークとシステムに関する国際ワークショップ）を、平成13年10月10日から13日の4日間、軽井沢国際高等セミナーハウスにおいて開催した。

今回のワークショップの参加登録者は、米国10名、タイ王国7名、フランス2名、ベトナム2名、国立情報学研究所7名、国内大学会社関係6名、フランス大使館1名、合計35名であった。

最初に小野欽司研究総主幹からウエルカムスピーチがあり、10名の参加を得た米国からの研究者、今回が初めての参加となるベトナムからの研究者などにむけて歓迎の言葉を述べた。

基調講演は小野欽司研究総主幹の「Linking Culture and Digital Technology: A New Attempt of Informatics Research」、Henri Angelino客員教授の「Will Virtual University and Virtual Laboratory take over Reality in the Future」、およびカセサート大学Nontawat Chanchaoen博士の「Inter-Intra Campus through E-Learning」の3件であり、またミシガン大学ディアボーン校のWilliam Grosky教授も「From Context-Free to Context-Sensitive Content-Based Retrieval」の題で講演した。また、基調講演を除く講演件数は、Mlabnetが16件、WAINSが11件に達し、さらにパネルセッションについても、両ワークショップのそれぞれで1件を開催した。

Mlabnet（研究代表者：フレデリック・アンドレス）は日本学術振興会とNSF（全米科学財団）の支援による日米科学協力事業セミナーであり、今回が最初の開催である。これは日本、米国、フランス、タイ王国の研究者から構成される、インターネット上のマルチメディア仮想研究所による国際共同研究であり、今回のワークショップではマルチメディアアノテーションやメタデータ、MPEG7などについて議論した。

WAINS（文部科学省科学研究費基盤研究 研究代表者：小野欽司）はアジア地域における学術研究情報シス

テムおよびネットワークに関する国際共同研究であり、日本、タイ王国その他の研究者による国際ワークショップを、1995年から日本とタイ王国で交互に毎年開催している。今回のワークショップでは、衛星画像転送、ネットワークコラボレーション、マルチメディア/ハイパーメディア、多言語処理、遠隔教育、生命情報科学など、日本・タイ王国の間の国際共同研究に関して、様々な側面からその成果について議論した。

秋の色濃い軽井沢を満喫しつつ、自由な雰囲気ワークショップとなった。

（ソフトウェア研究系 助教授 フレデリック・アンドレス
実証研究センター 助手 北本 朝展）



ワークショップを終えてバーベキューを楽しむ参加者

日本語文献の計量的研究



情報学資源研究センター データコレクション研究室 客員教授
統計数理研究所 領域統計研究系 教授

村上 征勝 (むらかみ まさかつ)

1968年北海道大学工学部卒、1974年同大学院工学研究科博士課程単位修得退学。工学博士。統計数理研究所研究員等を経て、1994年から同研究所領域統計研究系教授。2000年から国立情報学研究所情報学資源研究センター客員教授。専門はデータ解析。

文献研究に新しい方法が導入されつつある。著述内容の検討を中心とした従来の文献研究の方法とは異なり、文の長さ、使用している単語の長さ、単語の頻度、品詞の頻度、語彙量などの文章の数量的な性質に注目した文献研究法である。この方法によって、これまで著者の不明な文献、真贋が問題となっている文献、著作年代や著作順序に疑問がもたれている文献など、主としてオリジナルが残っていない古い時代の文献について、あらたな知見が得られつつある。

日本語文献に関しては、日本語の文章が分かち書きされておらず、単語と単語の間に区切りがないため単語の認識が困難なことに加え、コンピュータでの日本語処理が遅れたことなどもあり、計量的研究は欧米に比べ遅れた。

しかし、近年、『源氏物語』、『日蓮遺文』、西鶴作品、川端作品など日本の代表的な文学作品や宗教書に関し、計量的研究が進められている。

例えば『源氏物語』では、古くから多くの研究者が疑問を感じていた後半の10巻「宇治十帖」の文体の異質性について、何故そのような疑問が生じるのかが計

量分析によって明確になり、新たな研究の糸口が見えてきた。また現代の文章に関しても、読点の付け方に書き手の文体の特徴が現れるという分析結果を利用し、川端康成の戦前と戦後の作品における読点の付け方の差異から、川端の文体の変化時期に関し、新たな仮説が提案された。このような日本語文献の計量的分析の研究の現状や課題等について紹介した。

助動詞21種類の出現率の数量化 類による分析結果 (Aは第一部の紫上系物語の巻、Bは第一部の玉鬘系物語の巻、Cは第二部及び「匂宮三帖」の巻、Dは「宇治十帖」の巻)



革新と技術移転：INRIAの目的と夢



フランス大使館科学技術部 科学技術参事官

Michel Israel (ミシェル・イスラエル)

1977年パリ第6大学卒、1987年同大学からICデザインのためのCADツールに関するコンピュータ科学においてPh.D. (科学博士) 授与。エブリー大学 (フランス) 教授、基礎・応用科学学部長、CNRS (フランス国立科学研究センター) 情報方法論研究所長等を経て、2000年から在日フランス大使館科学技術部参事官。専門はコンピュータ・アーキテクチャ、デザイン・オートメーションなど。

INRIA (Institut National de Recherche en Informatique et en Automatique 国立情報自動制御研究所) の政策の特色の一つは、科学的探求と世界の社会経済問題について実り多い交流を確保することである。この交流は情報化社会に不可欠であり、ICST(情報コミュニケーション科学技術) が影響力を持っている様々な活動を導く。情報の世界の中心への道程は、科学的優秀性と技術移転の専門的手法を集めることから始まる。

ICSTは、ビジネスや仕事の創出と成長のための大きな可能性を生み出して、我々の社会を根底から変え

ていく。既に激しい達成の域にある科学的、技術的、経済的利害に加えて、教育的、文化的、社会的利害も同様である。これらの波及効果は各国のみならず地球全体にも影響する。

公的研究機関であるINRIAは、研究を応用と結びつけつつ、ICST分野で大きな役割を果たす「ノーベル・サークル」に力を注ぐことで、技術移転に大きな役割を果たせるよう努力している。

これまでに集めた科学的優秀性と専門的知見の質を背景として、INRIAは技術の移転に確固たる目的を持

っている。産業界における研究成果の価格安定政策、技術ビジネスの発展及びソフトウェアの流通を通じて、INRIAは研究の成果が社会経済界に最大の影響を与えることを確実にすることを目的としている。研究所の戦略プランにあるこの目的は、フランス政府による2000～2003年の4か年計画により確認されている。この中で、INRIAは技術の移転における国際的成功と名声を得るといった目的を有しているとしている。応用の主要な分野は、テレコミュニケーション及びマルチメディア、保健と生物学、工学、交通、及び環境である。

INRIAは、その政策を決定し、活動を調整し、技術移転と価格安定策を運用するため、次のような組織により支えられている。

- ・ 研究所総合運営メンバーである技術移転担当副所長が技術移転政策の大きな方向を決定する。
- ・ 開発及び産業関係部門が研究部門の担当者を活用して移転を調整・運用し、これら担当者は国際関係部長が任命する。

企業創出は研究を革新的成果に急速に変えるための特別な方法である

INRIAから生れた技術会社は、産業基準へのINRIAの研究標準に基づいて製品を産み出し、研究所のノウハウを広げている。INRIAから生れた最初の会社であ

るSimulogが1984年に創設されて以来、50以上の会社が創出されている。最も成功した会社の一つはソフトウェア部品で世界をリードするILOGで、ナスダックとニューマーケットに上場されている。

1999年には6つの会社が創設され、2000年には更に11社が創業しており、最近のものは2000年9月のXylèmeである。全体としてこれらの会社の連結収益と財産目録は8億フラン以上の総売上げをもたらし、1,400人以上の従業員を数えるに至っている。

INRIAは、これからも企業創出のために努力することとしている。



NII 定例研究会 第13回 11月21日

構造に基づいたウェブページ検索への包括的アプローチとウェブページセマンティクスへの応用



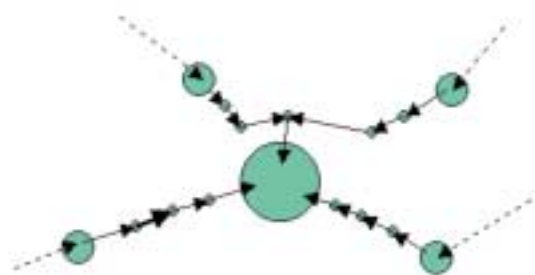
ミシガン大学ディアボーン校 コンピュータサイエンス学部長 / 教授
William Irvin Grosky (ウィリアム・アービン・グロスキー)

1971年エール大学工学・応用科学科博士課程修了、Ph.D.。ジョージア工科大学助教授、ミシガン州立ウェーン大学教授等を経て、2001年からミシガン大学ディアボーン校コンピュータサイエンス学部長/教授。専門はデータベース管理システム、マルチメディア情報システム。IEEE Multimediaのチーフエディターなど国際的に活躍。通信・放送機構の招聘で平成13年10月から平成14年3月まで国立情報学研究所に外国人研究者として滞在。

ユーザーの要求と自動検索システム間のミスマッチという意味のギャップを克服する、より知的なウェブ・ブラウザ及びサーチエンジンを提供するため、ウェブを通じた利用者の閲覧経路の履歴を用いる。標準的なキーワードよりも普遍的でありながら、様々な低いレベルのシンタクスの特徴を提供することで、利用者は通常と同じ手段で適切なウェブページを検索することができる。また、構造的キーワードや視覚的キーワードといった形式で、構造的及びマルチメディア的キューを用いる。ウェブ・ブラウザは利用者の閲覧履歴をモニタし、この履歴に基づいて、サーチエンジンと自動的に通信を行い、それぞれの利用者にとって他のウェブサイトを表示する。

ウェブページは決められたセマンティクスではなく、時間外に変化する複合セマンティクスを保持する。あるページにおける複合セマンティクスの各要素は、類似した閲覧経路を通じて、そのページにアクセスした利用者のグループに対応し、そのページの(テキスト

及びイメージに基づく)コンテンツ、構造(個々のタグより与えられた空間分布の情報)及び閲覧時間によって定義される。様々な利用者が所定のウェブ・ページを訪れるとそのセマンティクスは変化する。同様に、利用者がウェブを閲覧すると、その利用者のセマンティック・プロフィールが増大する。利用者の閲覧セマンティクスをウェブページのセマンティクスと比較することで、サーチエンジンを介して、利用者が更にどのウェブページを検索したらいいかを提示するようになる。



知能情報メディアとしての映像メディア ~ 知的撮影から対話的提示まで ~



情報メディア研究系 コンピュータビジョン研究部門 客員助教授
筑波大学 機能工学系 助教授

中村 裕一 (なかむら ゆういち)

1990年京都大学大学院博士後期課程電気工学第二専攻修了。同年京都大学工学部助手、1993年筑波大学電子・情報工学系講師、1999年同大学 機能工学系助教授。2000年から国立情報学研究所客員助教授。知能情報メディア、画像理解を専門とする。最近映像メディアの撮影から提示までを一貫して扱うことにより、人間にとって利用価値の高いメディアを実現する研究を行っている。

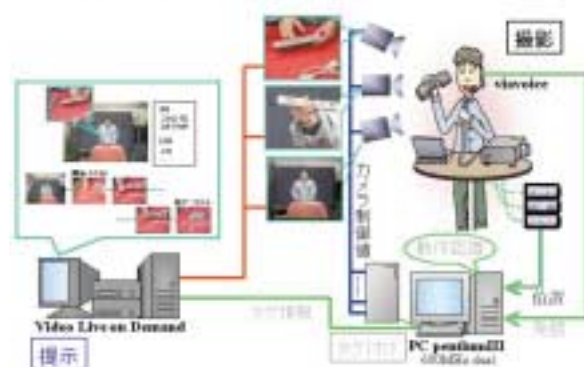
映像メディアを誰でも手軽に使えるコミュニケーション手段とするためには、映像取得から提示までを一貫して扱う知的システムを構築することが必要である。我々は、その一つのアプローチとして、料理や組み立て等の解説(プレゼンテーション)場面を題材とし、(1)人間の行動を知的に撮影するカメラマンの機能、(2)人間の行動を認識して映像を知的に編集するディレクターの機能、(3)映像が含んでいる情報をわかりやすく提示するマルチメディア・デザイナーの機能の3つの観点から、映像によるコミュニケーションをサポートする方法論を考え、それを検証するためのプロトタイプシステムを構築している。

各々、以下のような研究成果について、順を追って発表した。

- (1) 顔や手先など、撮影の主対象となる部分を複数のカメラで常に追跡して、いつでも映像として利用できる状態にする自動化撮影システムを構築した。「何をどのように伝えるか」という目的と「カメラの自動制御アルゴリズムやパラメータ」との関係を探り、不快感がなくわかりやすい映像を取得する方法を提案している。
- (2) 人間の行動(ここではプレゼンテーションを対象)において、重要な意味を持ち、注目する必要がある場

面や部分を検出する手法を提案している。注目すべき部分は、時間的・空間的に常に変化するため、「人間の行動(体の動きや発話等)を利用して、もっとも見せたい部分を検出する」ことが重要なポイントである。また、(3) プレゼンテーションのように、はっきりとした目的がある場合、各時点の人間の行動やその他の被写体には意味や因果関係がある。それらをうまく記述して、映像をわかりやすく提示するような映像提示手法、ビデオアイコンダイアグラムの手法を提案した。これは、映像中のフレーム(画像)をアイコンとし、それを概念図のように並べることで映像の構造を表現するものである。

人物行動の知的撮影・編集システム



NII 定例研究会 第14回 12月19日

情報検索の性能評価の指標について



情報学資源研究センター データコレクション研究室 客員助教授
駿河台大学 文化情報学部 助教授

岸田 和明 (きしだ かずあき)

1991年 慶應義塾大学大学院文学研究科図書館・情報学専攻博士課程中退。同年、図書館情報学助手。1994年、駿河台大学文化情報学部助教授。2000年11月から国立情報学研究所情報学資源研究センターデータコレクション研究室客員助教授。主として情報検索の手法や評価の研究に従事。

情報検索のシステムや手法の開発において、それらに対する性能評価は必要不可欠である。このためにはテストコレクションと呼ばれる検索実験用のデータセットが欠かせない。これには、実験用の文書データベースとそれに対するいくつかの検索課題、そして各検索課題に対する適合文書(または正解文書)の情報とが含まれており、研究者は、どれだけ効果的かつ効率的に正解文書を検索できたかという観点から自分のシステム・手法を評価できる。

しかし、この評価には次の2つの点で誤差が含まれる可能性がある。それは、適合判定の変動に起因する誤差、文書データベース中のすべての適合文書を発見できないことに起因する誤差、である。したがって、テストコレクションを使った性能評価の妥当性は、これらの誤差に対する評価指標の頑健性に大きく依存することになる。

この講演では、最近の検索実験で最もよく使用される評価指標である「平均精度」に関して、上記の誤差

についての頑健性を調査した結果を報告した。具体的には、上記の適合判定の変動に起因する誤差については、統計学分野で開発された測定誤差モデルを導入して、実証的な側面から検討を加えた。実際に、国立情報学研究所により開発された日本語文書テストコレクションであるNTCIR-1を用いてシミュレーションを試みたところ、適合判定の変動は、平均精度を使っ

た手法・システム間の相対的な評価にそれほど大きな影響を及ぼさないことがわかった。同様に、未発見の適合文書に起因する誤差についても、シミュレーションを試み、大きな影響がないことが明らかとなった。これらの結果から、平均精度による評価は上記の種類誤差に対して安定的であり、相対的な比較には十分な頑健性を持っているとの結論を得た。

シマンテク・ウェブのための移植可能情報抽出システム



情報学基礎研究系 記号科学研究部門 助教授

Nigel Collier (ナイジェル・コリアー)

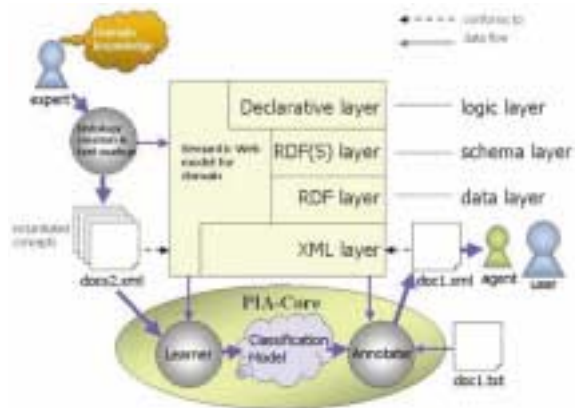
1996年英国UMIST (University of Manchester Institute of Science and Technology) 大学言語工学専攻博士課程修了 (Ph.D. in Language Engineering)。1996年から株式会社東芝研究開発センター、東芝フェロー。1998年から東京大学大学院理学系研究科情報科学専攻・日本学術振興会研究員を経て、2000年から現職。専門分野は自然言語処理・機械学習。

移植可能情報アクセス(PIA)プロジェクトは国立情報学研究所の国際共同研究プロジェクトである。これは、テキストにおけるシマンテク・コンテンツの自動注釈付けのためのドメイン対応システムを開発することを目的としており、次の4つのキー・ポイントに基づいている。

- (1) スタンフォード大学から幅広く使われているオントロジー・エディターであるProtege-2000へのJAVAプラグインとして我々が現在開発している注釈付けツール(PAT)。これはドメイン専門家にオントロジー(ドメインの概念とその関係を記述する知識構造)を作り出し、このオントロジーに矛盾しないテキストに注釈を付けることを可能にする。
- (2) 日本及び国際的な他の研究グループとの共同研究により、PIAで検討され開発されている注釈付けのための基準。これは、英語、日本語、タイ語及び他の言語での技術的用語と同一指示的表現の矛盾しない注釈付けを支援する。
- (3) 利用者がオントロジーと注釈を共有できるようになる注釈付け管理システム(PAM)。

(4) PIA-コア(図を参照)：ドメイン利用者からの例に基づく新しい文書にどのように注釈付けするかを学習するためのシステム。

我々は、結果的に開発されたシステムが、コンピュータが利用者に今日よりもより効果的に情報を見つけアクセスを助けることを可能にする、シマンテク・ウェブと呼ばれる次世代ウェブ上で、機械で理解できるコンテンツを幅広く利用できるようにすることを意図している。



受賞

末松安晴所長が高知県から平成13年度地方自治等功労者表彰を受賞

平成13年11月3日、末松安晴所長が高知県から平成13年度地方自治等功労者表彰を受賞しました。末松所長は、平成9年から13年まで高知工科大学長を務めました。

アンリ・アンジェリノ客員教授が勲三等瑞寶章を受賞

平成13年7月17日、アンリ・アンジェリノ実証研究センター客員教授が、日本政府から勲三等瑞寶章を贈与されました。アンジェリノ教授は、平成8年から12年まで在日フランス大使館科学技術参事官を務め、平成12年から国立情報学研究所客員教授として日仏間の学術交流の推進に取り組んでいます。

影浦峽助教授が日本図書館情報学会賞受賞

平成13年10月21日、第49回日本図書館情報学会研究大会において、影浦峽人間・社会情報研究系助教授が、著書『計量情報学：図書館/言語研究への応用』(丸善、平成12年)により、同学会賞を受賞しました。

佐藤寛子助教授が日本薬学会第27回反応と合成の進歩シンポジウムポスター賞を受賞

平成13年11月5日、佐藤寛子知能システム研究系助教授が、日本薬学会主催の第27回反応と合成の進歩シンポジウムにおける「反応試薬の分類-モデル化-予測-実証-フィードバック」の研究発表でポスター賞を受賞しました。

パピヨンプロジェクト：インターネット上のマルチリンガル多言語語彙データベース

1. プロジェクトの背景

このプロジェクトの目的は、日常的に使用するために適切な規模で、かつ、日本語に精通していないフランス人が利用しやすい日仏及び仏日辞書が今日存在しないことによる。既存の辞書は高額で、日本語の注釈部には日本語表記しか用いられておらず、音声転写はなく、外国人にとって非常に重要な様々な情報が欠落していることが多い。例えば、同一辞書中に、それぞれ、対応する漢字や、かな文字、ローマ字が記載されている場合は非常に少ない。

パピヨンプロジェクトは2000年1月に、フランス大使館による積極的なサポートと、GETA（フランス）とNII（国立情報学研究所）との協力のもとに開始された。後に、タイのパートナー（Kasetsart大学及びNECTEC（バンコク））がこのプロジェクトに参加した。現時点で扱われている言語は、英語、仏語、日本語、ラオス語、マレー語、タイ語、ベトナム語である。

2. Papillonプロジェクト

パピヨンプロジェクトは、LINUXの構造パラダイムを、マルチリンガル語彙ベースである"ピボット"へ適用し、二言語もしくは多言語の辞書から、フィルタリングを用いるなどして、素早く、非対称に抽出するというものである。この方式は、人間による利用や、コンピュータ上での利用といった、様々な利用形式に対応する。

各言語において、カナダのモントリオール大学Polguère教授とMel'cuk教授によって開発されたDiCoのフォーマットにモノリンガル辞書を生成する。この辞書の重要な要素は、"語"であり、その豊富な注釈と、詳細で多彩な利用を可能にする体系（連語関係、語彙の意味、例文など）を持つ。"中間言語のリンク"言い換えれば、"中間言語の意味"もしくは"軸"の中枢をなす"ピボット"によって語を関連付け、使用言語と等価の翻訳結果を得ることを可能とする。これらの軸は言語学的であると同時に概念的に規定されており、実用的かつ試用可能であり、存在論の構造による問題を回避する。

1つの軸は単にそれぞれの言語における語のリストにリンクされているだけではなく、他のシステムとの連携やデータベースを構築する際に役立つ情報の記憶といった問題を解決するために、外部の各システム（Wordnet, UNL, Ontos, LexiGuide, ALT/JEカテゴリー）の要素に等価もしくは類似している要素のリスト（同意語、概念、世界共通語、意味カテゴリー等）を保持している。

このプロジェクトにおいて革新的で重要なことは、内容の構築が法的に自由なオープンソース上で行われることである。情報ベースはFeM, Jdict, Saikamのシステムを構築した研究者や、インターネットを介した篤志による協

力によって作成される。パピヨンのサーバー上で、各協力者は作業中の情報ベースを閲覧することができ、各自の空間を与えられる。専門家の小グループのみが、検証と修正の後に、作業中の情報ベースに変更を加えることができる。作成されたデータはフリーウェア（オープンソース）として、一般向けに公開される。

この研究では、概念、技術、人間工学が用いられている。

3. 本プロジェクトの国際共同研究展開

現在、以下の点の関連付けが行われている。

データを表現するためのマクロ構造（言語学的構造）とミクロ構造（語彙構造）

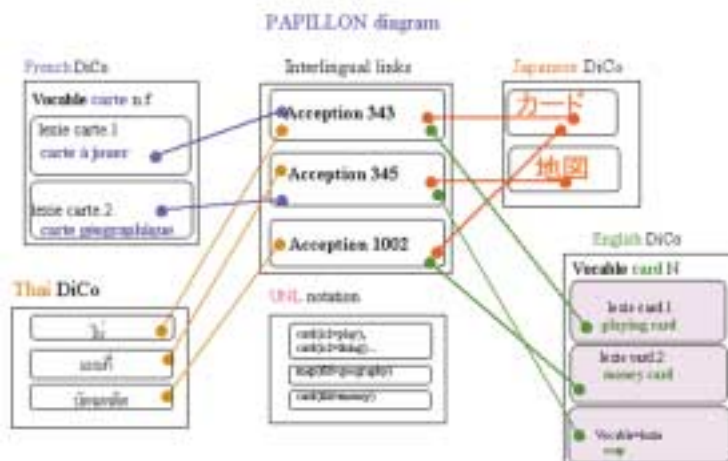
語彙資源を扱うためのツール

語彙ベースにおけるナビゲーションおよび閲覧と協調作業による辞書構築のための環境ピボット語彙ベースのアーキテクチャによって表現されるマクロ構造はGilles Serasset氏の論文に基づいている。モノリンガル語彙データベースのミクロ構造はAlain Polguère教授の研究である、辞書DiCoのフォーマットから引用している。DiCoはIgor Mel'cuk教授のDictionnaire Explicatif et Combinatoireを単純化したものである。辞書構築とインターネットを介した語彙ベースにおけるナビゲーション環境は2001年11月より2年間、日本学術振興会外国人特別研究員として招聘され本研究所にて研究を行うMathieu MANGEOT-LEREBOURS博士の論文に基づいている。

また、インターネットを介した語彙ベースにおける語彙エントリのストレージ環境は、フレデリック・アンドレス助教による情報管理エンジン、Phasmeに基づいている。

パピヨンのサイトは現在制作中であり、2002年1月よりオンラインでアクセス可能になる予定である。初期の研究の方向性としては、使用する構造と既存のリソースを用いた語彙ベースの構築法を開発する事である。

（ソフトウェア研究系 分散統合処理研究部門 助教 フレデリック・アンドレス）



外国人研究員の紹介



情報学資源研究センター
データコレクション研究室 客員助教授

Beatrice Daille (ベアトリス・ダイユ)

1986年パリ第7大学応用数学社会科学科卒、1988年同大学計算機科学科第二課程修了M.S.学位取得、1994年同大学基礎計算機科学専攻博士課程修了Ph.D.学位取得。CNRS(フランス国立化学研究所)研究員、パリ第7大学言語学部助教授等を経て、1995年からナント大学計算機科学科助教授。2001年10月から同年12月まで国立情報学研究所客員助教授。専門は自然言語処理。

私はナント大学計算機科学科助教授で、1998年からナント計算機科学研究所(IRIN)自然言語処理(NLP)グループ主任をしています。専門分野は、専門用語処理、テキスト上データの情報検索及び機械翻訳です。私は、これまでに、機械翻訳に関するヨーロッパの研究プロジェクト(1989年から1992年にEUROTRA、1992年から1993年にET10/63、1994年にLS-GRAM)、情報検索に関する国際研究プロジェクト(1996年から1998年にフランスとイスラエルによるプロジェクトであるSTEKCHI)、また、コーパス運用を通じた情報技術に関するフランスの国家プロジェクトにも参加しました。

1998年の第17回計算言語国際会議/第36回計算言語学会年次大会(COLING-ACL98)のCOMPUTERMワークショップで、私は影浦助教授に会いました。ウェブ上で仏日辞書を構築することを目指すパピヨン・プロジェクトに参加していることから、私は2000年8月に国立情報学研究所で開催されたパピヨン・プロジェクトの第1回ワークショップに参加し、影浦助教授に再会しました。彼との議論から、我々と一緒に非常に興味深い研究ができると確信し、私は、自分が責任者を務める自然言語処理研究チームが行っている仕事を紹介するために、2001年7月に彼をナント大学客員助教授として招聘しました。

3か月の日本滞在中に、私は国立情報学研究所とIRINのNLP研究チームとの長期的な研究協力関係を確立したいと思っています。来日して以来、影浦助教授の学生やコリアー助教授の仕事を紹介してもらった傍ら、私は専門用語獲得に関する自分の研究を発表しました。共通の関心となっている課題は、専門用語獲得及び構造化、仏日連携です。最初の課題である専門用語取得に関しては、我々は、台湾で開催される第19回計算言語国際会議(COLING2002)での第2回目のCOMPUTERMワークショップの準備を行っています。2番目の課題である仏日連携に関しては、我々は、日本語テキストがフランス語テキストに翻訳される際の、仏日対訳語の取得に関する日仏コーパスの研究を開始しています。この最初の実験は専門語と固有名詞の対訳の取得に適用しているもので、他の語彙単位にも拡大することにしています。

滞在中に私は日本の研究者たちと接するようにしています。私はATR研究所の研究会議に参加し、また、11月27日から29日まで開催されたNLPRSの会議にも参加しました。科学的な視点と将来の協力関係の面から、私は今回の滞在が真に有意義なものであると言うことができます。私は国立情報学研究所及び日本での残された滞在期間を楽しみたいと思っています。(原文英語)

研究成果

「高度分散情報資源活用のためのユービキタス情報システムに関する研究」(学術振興会未来開拓学術推進事業プロジェクト:研究代表者安達淳情報学資源研究センター長/教授)において進めてきた語彙的情報資源自動構築研究成果が、この度影浦峽・小山照夫の招待編集により、Terminology誌の特集号(第6巻第2号)としてまとめられました。内容は次の通りです。

Recent advances in automatic term recognition: Experiences from the NTCIR workshop on information retrieval and term recognition

Kyo Kageura, Masaharu Yoshioka, Koichi Takeuchi, Teruo Koyama, Keita Tsuji and Fuyuki Yoshikane

An application and evaluation of the C/NC value approach for the automatic term recognition of multi-word units in Japanese

Hideki Mima and Sophia Ananiadou

Automatic term recognition based on statistics of

compound nouns

Hiroshi Nakagawa

Extracting terms by a combination of term frequency and a measure of term representativeness

Toru Hisamitsu, Yoshiki Niwa, Shingo Nishioka, Hirofumi Sakurai, Osamu Imaichi, Makoto Iwayama and Akihiko Takano

Term recognition using corpora from different fields

Kiyotaka Uchimoto, Satoshi Sekine, Masaki Murata, Hiromi Ozaku and Hitoshi Isahara

Statistical and linguistic approaches to automatic term recognition: NTCIR experiments at Matsushita

Yoshio Fukushige and Naohiko Noguchi

Japanese term extraction using dictionary hierarchy and machine translation system

Jong-Hoon Oh, Juho Lee, Kyung-Soon Lee and Key-Sun Choi

Using author keywords for automatic term recognition

Masao Utiyama, Masaki Murata and Hitoshi Isahara

平成13年度国立情報学研究所公開講演会を開催



東会場（一橋記念講堂）における講演



西会場（キャンパスプラザ京都）における講演

国立情報学研究所公開講演会は、研究所と関連の深い、大学・企業等の研究機関、図書館、情報処理センター等に勤務する研究支援職員を主な対象として、研究所の行う研究・開発等の普及を目的に、研究活動に関連した今日的課題について研究所内外の研究者が発表を行うものです。

平成13年度は、「電子ジャーナル」を主なテーマとして、東西2会場において開催し、合わせて580人を超える参加者を集めました。主な参加者は、大学等の図書館職員や研究者、一般企業や研究機関の職員・研究者等です。

主催者挨拶に続き、千葉大学附属図書館長の土屋俊教授が、電子ジャーナルと大学図書館の現状と課題について基調講演を行った後、西会場では北海道大学附属図書館の坂上光明事務部長及び本研究所の高野明彦教授が、東会場ではユサコ株式会社の増田豊マーケティングセンター長及び本研究所の安達淳教授が、それぞれ一般講演を行いました。

参加者からは、電子ジャーナルのみならず、学術コミュニケーションをめぐる諸問題がよくわかったという感想とともに、今後に対する期待の声も多く寄せられました。

公開講演会の日時、会場、開催内容は次のとおりです。



参加者からの質疑に答える講演者

1. 日時・会場

西会場：平成13年11月30日（金）13:30 - 17:00
キャンパスプラザ京都

東会場：平成13年12月18日（火）13:30 - 17:00
一橋記念講堂

2. テーマ

「電子ジャーナルに向けて：研究者・図書館・出版社の挑戦」

3. プログラム

- ・主催者挨拶
国立情報学研究所長 末松安晴
- ・電子ジャーナルと大学図書館
[講師] 千葉大学附属図書館長 土屋俊

【西会場のみ】

- ・電子ジャーナル利用技術の研究動向
[講師] 国立情報学研究所教授 高野明彦
- ・電子ジャーナル導入上の課題
[講師] 北海道大学附属図書館事務部長 坂上光明

【東会場のみ】

- ・学術雑誌の電子化：さまざまなアプローチ
[講師] 国立情報学研究所教授 安達淳
- ・電子出版における海外の動向
[講師] ユサコ株式会社マーケティングセンター長 増田豊
- ・質疑応答
- ・司会進行

【西会場】国立情報学研究所国際・研究協力部長 濱田喬

【東会場】国立情報学研究所教授 橋爪宏達
講演時の資料を下記のURLで公開しています。
<http://www.nii.ac.jp/hrd/HTML/Symp/index.html>

（成果普及課）

ワークショップ「学術コミュニケーションの最新動向」を開催



電子ジャーナルをめぐる動向をはじめとして、昨今の学術コミュニケーションを取り巻く状況は大きく変貌しつつあります。国立情報学研究所では、学術コミュニケーションの最新動向について、国内外からの報告及び討論を通して認識を深めることを目的として、平成13年11月7日（水）にワークショップ「学術コミュニケーションの最新動向」を開催いたしました。

研究者、大学図書館職員等約50名が参加し、電子ジャーナルをはじめとして、研究活動、学会誌、学術雑誌の諸問題について、盛んに意見交換が行われました。

当日の講演及び講演者は次のとおりです。

学術コミュニケーションの最新動向：日本の全般的状況

土屋俊：千葉大学附属図書館長

研究者サイドから見た学術コミュニケーションの動向

植田憲一：電気通信大学レーザー新世代研究センター長

海外の状況について

Martin Richardson：Publishing Director, Oxford University Press

University Press

（成果普及課）



リチャードソン：オックスフォード大学出版会出版部長（左）による講演

数値シミュレーションへの入門コースを開催

11月1日、2日の両日、学術総合センター12階会議室において国立情報学研究所主催、日本応用数理学会後援で数値シミュレーションへの入門コース（Tutorial 2001: Introductory Course to Numerical Simulations for Young Applied Mathematicians and Engineers）が開催された。講師には国内外の著名な先生方をお迎えし、数値解析を学んでいる学生、若手研究者をはじめとする84名の参加者があった。興味深い各講演に対して質疑応答も活発に行われ、有意義なチュートリアルであった。プログラムは下記のものであった。

11月1日(木)

- (1) 藤田宏(東海大学)：ナビエ・ストークス方程式の数学解析への登り口と展望台
- (2) Roland Glowinski (Univ. of Houston, USA)：An operator splitting methodology for the numerical simulation of incompressible viscous flow：An Introduction.
- (3) 三村昌泰(広島大学)：特異極限法と非線形現象
- (4) 河原田秀夫(千葉大学)：Distribution theoretic approach to multi-phase flows.

11月2日(金)

- (5) Olivier Pironneau (Univ. Paris 6, France)：Computer solution of Maxwell's equations in homogeneous media.
- (6) 田端正久(九州大学)：有限要素法における誤差評価



- (7) Jacques Periaux (Dassault Aviation, France)：Hierarchical evolutionary algorithms and game theory: a road map to multi-objective design optimization in aeronautics.
- (8) Zhong-Ci Shi (Chinese Academy of Sciences, China)：Nonconforming finite element methods.
- (9) Yuri A. Kuznetsov (Univ. of Houston, USA)：Basic preconditioned iterative methods.

組織委員会より、会議室を利用させて頂きましたことを感謝いたします。

（情報学基礎研究系 情報数理研究部門
教授 速水 謙）



セイコーエプソン株式会社相談役
中村 恒也 (なかむら つねや)

(会社概要) セイコーエプソン社の主要製品は完成品と電子デバイスの二種類に分かれ、両者の割合は6対4である。平成13年春の時点での企業規模は、関連会社115社との連結売り上げで、1兆3409億円、利益は919億円で長野県内では最大である。輸出が売り上げの70～80%を占める。社員は国内・国外併せて69,000人。内外の比は国内3に対して国外が7。本社機構は長野県諏訪市に集中している。

(狂う時計と狂わぬ時計) 自己紹介から始める。大正12年、山形県酒田市に生まれた。地元の中学を出て、日大の理工学部機械科に入った。小・中学生時代は勉強が嫌いで、機械いじりばかりしたが、大学で機械科に行くとたんに勉強が面白くなった。

昭和19年に卒業して第二精工舎に入社、腕時計作りをした。戦後、スイス時計の真似ごとを卒業し、作りやすい、組み立てやすい時計の自前での開発を目指し、マーベルをつくった。しかしゼンマイ時計では精度に限界がある。一日に5～10秒狂う時計を年に1秒以内の狂いにすることを目指した。水晶時計に目を付け、筆筒二筆大の巨大時計を腕時計にまで小さくする難題と取り組んだ。開発に10年掛け1969年世界で最初にクォーツを完成し発売した。消費電力の少ないICの開発が鍵であった。東京オリンピックは時計と同時にプリンタも開発した。その後、プリンタ専門の信州精機と合併して、1985年セイコーエプソンとなった。

(小は大を兼ねる) 製造業にとっては技術プロパーは価値が無く、商品に活かされて初めて価値が生ずる。客がニーズを口にするときにはもう手遅れだ。潜在的なニーズを先回りして見つけて、それを自分のところの得意技術と結びつけて商品化する。当時、狂わない時計のニーズはなかったが、ゼンマイ時計と同じ値段になったとき、狂うゼンマイ時計と狂わない水晶時計と二つ並べてどちらが良いかといわれれば、答えはおのずからはっきりしている。

しからば当社が得意とするところは何か。それは「小」と「省」である。ギネスブックにも載っている厚さ0.85ミリの世界一薄いつ時計や、世界最小のロボットに象徴される。商品としてはカラリオだ。カラリオ

は25ミクロンのインクジェットの穴をプレスで672個開けることで可能になった。「省」は、ゼンマイ時計からクォーツになったときに消費電力の節減に苦勞したのがその典型だ。更にカラー技術、スピード化技術、消費電力関連技術、動画の技術、半導体技術のすべてに関わり、その結果携帯電話の液晶ディスプレイや極少消費電力のICが誕生した。

(物づくりと人づくり) 別のことではなく、物づくりが人づくり、技術イコール人という風土が財産となる。他人や地域との共生が重要だ。セイコーエプソン社は、家族主義、身体障害者の雇用、男女平等などで我が国の先端を行っている。また自然との共生を重視し、工場敷地の木は切らない。フロンを全社的に使っていたため、オゾン層を破壊するとわかった時は困ったが、全社挙げての取り組みに成功し国連やワシントンで表彰を受けた。

(テン・キーワード) この50年間学んだことをリーダー向けの10個のキーワードにした。1)はビジョン。すなわち自分で夢中になれるものを見つけ出す。2)は部下を信頼すること。3)は情熱。叱り、誉め、大声を出しても相互信頼があれば部下はついてくる。4)は説得の技術。5)は常にエンドユーザーのためにであること。中間者の立場に立つ危険を犯しやすい。6)は決める。反対意見も出るが、それを否定せず、それでも決める。トレンドを見抜いて先回りする。大問題になってから大決断をするよりも、普段から先回りして小決断をこまめにやる。7)真実に謙虚。一度決めたことでも止めた方が良いと思ったらこだわらずに止める。8)常に前向き。過ぎたことには興味を持たず、為替相場のように自分でどうしようもないことは割り切る。9)三現主義。すなわち、現場主義、現実主義、現物主義のこと。これに先見が加われば完璧。10)加減主義。減減主義の反対で失敗を恐れない態度を産む。これら10項目をまとめれば、感性、信念、実行の三つになる。

50年を振り返って、改めて物づくり、製造業の大切さを思う。製造業の基本は「原理原則を技術に変え、それを商品にすることで人々の役に立つ。同時にその行為が働く場を創りだして行く。それによって人類の生活を豊かにし、世界経済の発展に貢献する」ことだ。日本は大きな力をもっているのだから、国際場裏で自信を持って有言実行を心がけることが大切だと思う。

事業活動

DATABASE 2001 Tokyoへの出展



わが国最大のデータベース総合展である「DATABASE 2001 TOKYO」が、平成13年10月30日(火)から11月1日(木)の3日間、東京国際フォーラム展示ホールにおいて、財団法人データベース振興センターおよび日本データベース協会の主催により開催されました。

国立情報学研究所も、昨年に引き続き出展し、電子図書館サービス(NACSIS-ELS)を中心に、情報検索サービス(NACSIS-IR)、総合目録データベースWWW



検索サービス(Webcat)等のデモンストレーションを行いました。

とくに電子図書館サービスについては、論文の全文を画像で表示・印刷できるということもあって、来場者の高い関心を集め、出展担当者にさまざまな質問や要望が寄せられました。

主催者の発表による、展示会の出展社・団体数は102社・団体、3日間の総入場者数は33,696人でした。

(成果普及課)

中国との学術情報交流プロジェクトによる職員派遣

国立情報学研究所では、中国との学術情報交流プロジェクトとして、国際交流基金との協力により北京日本学術センター図書資料館の情報化支援を行っています。その支援活動の一環として、日本語資料を有する中国国内の図書館と同センターとの連携を図るために、平成13年6月に中国国内図書館への訪問調査を行いました(本誌No.6参照)

この訪問調査の結果を受けて、平成13年10月と11月の2回、下記のとおり職員を派遣しました。

(1)平成13年10月9～20日。細川国際・研究協力部成果普及課企画調査係長、米澤開発・事業部コンテンツ課コンテンツ形成管理係長の2名を派遣し、同センターへの情報化支援を継続して行うとともに、天津図書館の日本語資料データベース化を実現するために、中国国内で初めて目録システム地域講習会を開催しました。10月15日から17日まで、同センター事務室で実施した目録システム講習会では、天津図書館からの受講生4名に対して、本研究所からの派遣職員と同センター職員が講義と実習を行いました。講習会終了後、天津図書館では、所蔵する約6万冊の日本文庫を総合目録データベースに登録する作業を進めています。

(2)平成13年11月4～11日。宮澤実証研究センター長、京藤開発・事業部コンテンツ課長の2名を派遣し、これに国際交流基金の鈴木玲氏が同行しました。同センターでは、6月訪問時に出された諸課題(中国語資料のデータベース化、中国国内における日本関係資料の



講習会における実習の様子



北京日本学術センター職員による講義

センターとしての機能の強化等)の解決に向けて、より具体的な助言、指導を行いました。

また、同センターの教官及び職員とともに、関係図書館を訪問し、中国における日本語資料のデータベース化を推進するにあたって、調査・打ち合わせ等を行いました。天津図書館では、開始された登録作業に関するフォローアップを行いました。大連図書館では、データベース化が望まれている旧満州国時代の約

17万冊の日本関係資料の状況を詳しく調査しました。

中国国家図書館では日本語資料のデータベース化についての助言を行いました。

さらに、中国国内の図書館ネットワークの中心的機関である北京大学図書館及び中国農業大学図書館を6月に引き続き訪問し、同センター、同ネットワーク、国立情報学研究所の3者連携の方策等について討議を行いました。(コンテンツ課)

ドイツにおける目録システム講習会の開催

国立情報学研究所の目録所在情報サービスは、国内のみならず、英国やドイツをはじめとする欧州諸国や中国など、海外で日本語資料を扱う学術研究機関でも利用されています。

平成12年11月にベルリン日独センターで開催されたワークショップ「21世紀における日本情報」(本誌No.2参照)を契機に、ドイツ及び周辺諸国の日本研究図書館では国立情報学研究所の目録所在情報サービスへの関心が高まり、関係機関から目録システム講習会開催の強い希望が寄せられていました。こうした要望に応えるため、国立情報学研究所では、平成13年10月10日から12日に、国際交流基金ケルン日本文化会館及び日本資料図書館連絡会との共催により、ケルン大学日本学科及びケルン大学電算機センターの協力を得て、「目録システム講習会」を開催しました。

本講習会は、国外で初めて国内開催分と同等の内容を実施する講習会となりましたが、受講者の皆様は熱心に取り組み、14名の方が修了されました。

講習後には、入力したデータを各図書館でのOPAC(オンライン閲覧目録)として利用できる個別版サービスSPCATについても、実際にNACSIS-CATにデータが入力されているデュースブルク大学、ミュンヘン大学、チューリッヒ大学所蔵分を例に紹介し、画面構成や検索方法などについて学んでいただきました。

(成果普及課)



開講式で挨拶をされる坂戸勝ケルン日本文化会館館長



講習会における実習風景

人事異動(平成14年1月)

採用 平成14年 1月 1日付

照井 一成

情報学基礎研究系 アルゴリズム基礎研究部門 助手

客員採用 平成14年 1月16日付

長谷川 亨

情報基盤研究系 ネットワークセキュリティ研究部門 教授
本務先: 株式会社KDDI研究所モバイルIPネットワークグループ グループリーダー

米田 進

情報基盤研究系 ネットワークセキュリティ研究部門 助教授
本務先: 日本テレコム株式会社情報通信研究所 通信研究部門担当部長

転入 平成14年 1月 1日付

藤山 秋佐夫

学術研究情報研究系 生物系研究情報研究部門 教授
前職: 国立遺伝学研究所 総合遺伝研究系 助教授

昇任 平成14年 1月 1日付

佐藤 寛子

知能システム研究系 計算知能研究部門 助教授
前職: 情報メディア研究系 情報検索研究部門 助手

今後の国立情報学研究所のサービスの概要

国立情報学研究所と科学技術振興事業団との情報関係事業の連携・協力の調整結果

1. 情報関係事業の連携・協力

平成12年12月、総務庁「科学技術に関する行政監察結果に基づく勧告（第一次）」により、国立情報学研究所と科学技術振興事業団の情報関係事業の連携・協力のあり方について検討し、所要の措置を講じるよう

指摘を受けました。平成13年1月から、文部科学省と両機関で検討を行い、平成13年8月に両機関の情報関係事業の連携・協力のあり方についてとりまとめが出され、両機関の情報関係事業の整理・統合について方針が示されました。

2. 今後の国立情報学研究所のサービス

従来のNIIのサービス		計 画
1. 情報検索サービス (NACSIS-IR)	学会発表データベース	平成14年3月に更新終了。平成15年3月にサービス終了。サービス終了後はJSTのJ-STAGEから提供(データ移管、JST側のサービスの開始時期等及び個別版データの提供サービスについては調整中)
	SCIE (Science Citation Index Expanded)	サービス継続
	COMPENDEX PLUS	平成14年3月にサービス終了。サービス終了後はJSTのSTN Internationalから提供。
	ISTP, ISTP&B	平成14年3月にサービス終了。
	MathSci	
	Harvard Business Review	
	学術論文データベース	平成14年3月に更新終了。平成15年3月にサービス終了し、電子図書館サービスへ移行。
	臨床症例データベース	サービス継続。
	学術雑誌目次速報データベース	
	研究者ディレクトリ	平成13年度調査分まで更新し、平成15年3月にサービス終了。平成14年度調査からJSTのReaDに統合。サービス終了後はJSTのReaDから提供 (JSTからのサービスの開始時期については調整中)
上記以外のデータベース	サービス継続。	
2. ディレクトリ系データベース	研究活動資源ディレクトリ (NACSIS-DiRR)	平成13年度調査分まで更新し、平成15年3月にサービス終了。平成14年度調査からJSTのReaDに統合。サービス終了後はJSTのReaDから提供 (JST側のサービスの開始時期については調整中)
3. 学会等情報発信支援事業	オンラインジャーナル編集・出版システム (NACSIS-OLJ)	平成14年4月にJSTのJ-STAGEへ統合。サービス終了後はJSTのJ-STAGEから提供 (JST側のオンラインジャーナル編集・出版等のシステム等については調整中)
	電子図書館サービス (NACSIS-ELS)	サービス継続。
4. ネットワーク事業	SINET スーパーSINET	JSTのIMnet及びITBLをNIIのSINET及びスーパーSINETに統合 (具体的な移行計画についてはJSTと調整中)
5. 研究者公募情報提供サービス (NACSIS-CIS)		平成13年10月にJSTのJRECINへ移管。
6. 目録所在情報サービス (NACSIS-CAT / ILL 及び Webcat)		サービス継続。
7. 学協会情報発信サービス (Academic Society Home Village)		サービス継続。
8. オンライン学術用語集 (NACSIS-Sciterm)		サービス継続。

注) 〇はJSTのサービスへ移行。

問合せ先 国立情報学研究所 (URL <http://www.nii.ac.jp>)

開発・事業部 企画調整課 共同利用係 電話03-4212-2225 E-mail: user-request@nii.ac.jp

科学技術振興事業団 (URL <http://www.jst.go.jp>)

情報事業本部 情報調整室 電話03-5214-8402 E-mail: wada@tokyo.jst.go.jp

お知らせ



国立情報学研究所では、「NII Journal」第3号を刊行しました。今回は、情報学研究において膨大な情報の組織化、流通、活用のため必須の役割を果たす「情報プラットフォーム」を特集として取り上げています。

「情報プラットフォーム」を情報の生成、蓄積、流通、共有、利用のための共通の場と捉え、情報流通プラットフォームの基盤であるインターネット、マルチメディアコンテンツ、ソフトウェア、モバイルエージェント等のエージェント技術、人と機械との共生インターフェース、電子商取引や情報セキュリティ等の情報社会論など、様々な角度から論じています。

掲載されている論文の内容は、国立情報学研究所のオンラインジャーナル提供システム (NACSIS-OLJ) や電子図書館サービス (NACSIS-ELS) にも収録して公開します。詳しくはホームページ (URL <http://www.nii.ac.jp/hrd/HTML/Journal>) をご覧ください。

シンポジウム「未来を拓く先端情報学：Advanced Informatics Opening up the Future」

国立情報学研究所では、平成14年4月からの大学院情報学専攻の開設を前に、「未来を拓く先端情報学」をテーマにシンポジウムを下記のとおり開催します (一般公開・参加無料)

また、同時に、国立情報学研究所のオープンハウス (国立情報学研究所の教官による研究紹介、ポスター展示・発表や学術デモンストレーションなど) を実施します (12:20~17:30) 多数のご来場をお待ちしています。

日時：平成14年2月27日(水) 10:00~17:30

会場：学術総合センター (東京都千代田区一ツ橋2-1-2 地下鉄「神保町」又は「竹橋」下車徒歩約2分)

主なプログラム (予定)

国立情報学研究所の概要と大学院情報学専攻について：小野欽司研究総主幹、上野晴樹知能システム研究系研究主幹

社会を「科学」するということ：佐和隆光副所長 (京都大学経済研究所長)

IT化の進展と価値観の変化：青木利晴株式会社NTTデータ代表取締役社長

演繹機能を持つサーチエンジンProtoformのコンセプト：ロフティ・ザデー カリフォルニア大学名誉教授

国立情報学研究所の研究紹介

大学院学生募集に関する説明会

お問合せ先：国立情報学研究所 国際・研究協力部 研究協力課 E-mail: kenkyou@nii.ac.jp

〒101-8430 東京都千代田区一ツ橋2-1-2 学術総合センター TEL: 03-4212-2105

プログラムの詳細と申込み方法はホームページ (URL <http://www.nii.ac.jp/daigakuin/index.html>) でご案内しています。また、大学院情報学専攻の概要と学生の募集要項等についても上記ホームページでご案内しています。

Seventh Pacific Rim International Conference on Artificial Intelligence (PRICAI-02)

第7回環太平洋人工知能国際会議

平成14年8月18日(日)~22日(木) 学術総合センター一橋記念講堂 (東京都千代田区一ツ橋)

主催：(社)人工知能学会、後援：国立情報学研究所

会議の詳細についてはURL <http://pricai-02.nii.ac.jp/>でお知らせしています。

NII定例研究会

第15回：平成14年2月20日(水) 15:00~17:00 学術総合センター12階 会議室

第16回：平成14年3月20日(水) 15:00~17:00 学術総合センター12階 会議室

プログラムの詳細はURL <http://research.nii.ac.jp/teirei/>でお知らせしています。参加は無料です。

情報学研究に関心をお持ちの研究者・技術者の皆様の参加をお待ちしています。

国立情報学研究所の研究・事業活動について詳しくはホームページもご覧ください。 <http://www.nii.ac.jp/index-j.html>



NII News 国立情報学研究所ニュース 第8号 平成14年1月

発行 国立情報学研究所 NII News に関するお問い合わせは国際・研究協力部広報調査課まで

〒101-8430 東京都千代田区一ツ橋2-1-2 学術総合センター TEL:03-4212-2132 E-mail: kouhou@nii.ac.jp

National Institute of Informatics